巻頭エッセイ

とらえられないものを，とらえる人たち

岡本真由美

『ジーニアス英和辞典』第5版の追い込み作業の手伝いのため，湯島の編集部に来ている。殺気立つような真剣さでゲラ（校正刷り）と格闘している編集部の人たちを横目に，隅っこで細細と仕事をする。目の前のゲラには，「この語義の順序OK？」や「このaはtheでは？」など，たくさんのコメントや提案が書かれていて，執筆者や校閲者がゲラの上で議論をくり広げている。辞書ってこうやって作られているのだ，とあらためて思う。高校生の時，参考書が嫌いだった私は，「辞書と心中するつもりで勉強しろ」とどこかに書かれた文章を読んで，「よし，辞書と心中してやる」と辞書だけが頼りとばかりに引きまくっていた。当時の辞書はあまり説明も詳しくなかったけれど，いくつかの語義と少しの用例や注記から，単語の意味や使い方を想像した。そんな辞書はこのようにして作られているのだ。

語義についている《英》表記のチェックをしていたときだ。cleverを調べると，英国系辞書の多くではいくつもの語義に《英》表記がついていた（これは英国人の言葉だよという意思表示か？）。米国系の辞書を引いてみるとcleverの《英》表記はごく限定的にネガティブな語義にあるのみだ（こんな風に批判的に使うのは英国人だよという意見表明か？）。ふむ，cleverって一般的な語のイメージなのにと思い，米国人の知り合いにcleverを「利発な」という意味ではあまり使わないのかと尋ねると，不思議そうに「よく使うよ」と言う。インターネットをみると，米国人と英国人がcleverの使い方を議論しているサイトがあったが，どうやら英米の違いはあまりないようだ。《英》とされていたcleverは，よりユニバーサルに変化してきているのかもしれない。そのサイトに「BBCのTV番組*Doctor Who*では，Doctorが自分のことをcleverと言うから，英国人のほうがポジティブな意味で使うのかも」という投稿があった。「英国人は自分のことを賢いなんてboastfulなことは絶対言わない」という指摘に「Doctorは英国人じゃなかった，異星人だった」との返事があって，笑ってしまった。

そういえば，大学生の時，インド系英国人のゼミの先生はいつも“Be humble.”と言っていた。私がmodestという言葉を使うと，英国人はhumbleを使うのだと直された。modestではまだ足りない，もっと奥ゆかしくhumbleに，ということだった。もしかしてhumbleにも《英》表記があるのかと調べるが，ついていない。誰よりも英国紳士であろうとした先生の言葉へのこだわりは，《英》の象徴のようだったのにとがっかりする。cleverより《英》らしい気がしたのに，英米の言葉遣いの違いは難しい。

言葉が生き物だとは本当だ。国境などたやすく越え，人と時代の手によってダイナミックに変化していく。しかし，そんなとらえようのないものを，とらえようとする人たちがいる。辞書のほんの数行の中に，なんとかして言葉の今の姿を書ききろうとする，辞書の作り手たちだ。とらえてもまたすぐ変わり，生まれ，消えていく言葉の姿を辞書を通してなんとか伝えようとする。簡単なことではない。でも，辞書と心中しようと思っていた私の中の高校生は言う，「がんばって」。多くの読者に，辞書の作り手たちがとらえたものが届きますように。鬼気迫る編集者とゲラの山に埋もれて，そんなことを思った。

（おかもと　まゆみ・関西大学准教授）

『ジーニアス英和辞典』第５版の意義
―最近の学習英英辞典の動向から

南出　康世

◆はじめに

学習英英辞典編集に関わる海外の動向に触れることから話を始めたい。一つは，*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*（MED（AL））の編集主幹でもあり，辞書学者としても著名な Michael Rundell の「紙の辞書の終焉」の宣言*である。かなり大胆な宣言で関係者を驚かせている。彼の予告する「紙の辞書終焉」の理由を３つ上げると，次のようなものになる。

⑴英語の多様化・変化が激しすぎて，５年に１回程度の改訂では，紙の辞書はとてもこれに追いつけない。

⑵コンピュータ・コーパスなどにより辞書に収録すべき情報が増えて，紙の辞書には収まりきらない。無理に収めると携帯版というより机上版に近い形となる

⑶インターネット上の辞典はパソコン，スマートフォンを所持していれば，世界各地でいつでもどこででも検索できる。

ここで主な英語辞典の出版形態について見ておこう。今年４月に発売された *Longman Dictionary of Contemporary English*[6]（LDOCE[6]）はペーパーバックでもサイズが22.4×14.8×6.6㎝で重さは1580g もある。これをカバンに入れて持ち歩いている姿は想像し難い。この辞書には DVD-ROM が付属されておらず代わりに pin（暗証番号）がついていて，インターネット上にある LDOCE[6]にアクセスできるようになっている。ネット上の辞書では発音が聞け，語義，新語の収録も豊富で情報量が多い。インターネット辞書が主で，紙の辞書はおまけという感じがする。*Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary*[8]も紙の辞書として発行されているが DVD-ROM は付いていない。一般英語辞典 *American Heritage dictionary of the English Language*[6]，*Collins English Dictionary*[12]も本年中に出版が予告されているがいずれも紙の辞書である。ただし後者は Kindle 版と同時発売される。いずれにしても現在のところ紙の辞書はほそぼそとではあるが継続していて終焉はしていない。

さらに関連する話題がもうひとつある。集合知辞典（crowd-sourced lexicon；原則として執筆・訂正が一般の人々に開かれている辞典。百科事典であるが Wikipedia などが代表例）と専門知辞典（expert-sourced lexicon；専門編集者が執筆・編集）である。紙の辞書として出発した英語辞典は，専門知辞典でありその伝統は上で見たとおり今も続いている。集合知辞典はインターネットの普及と大きく関わっている。現在ネット上の多くの辞典，特に新語辞典は集合知辞典である。Macmillan には２つのネット辞書がある。*Macmillan English Dictionary* と *Open Dictionary* である。前者は紙の辞書 MED を引き継ぐもので，当然専門知辞典である。年２，３回程度の改訂を行い up-to-date を図っている。後者はその名から推測されるように集合知辞典で，投稿された項目は多くないが，もし MED がここから語を採用する場合は，専門知辞典式に書き改めるという。

◆『ジーニアス英和辞典』第５版（以下Ｇ５）の特長

Ｇ５はもちろん紙の辞書の伝統を受け継ぎ，専門知辞典である。Ｇ５は時代のニーズに答えるため全面的な改訂を行った。主な改訂方針を紹介しよう。

⑴すべての語及び語義を徹底的に見直し，必要に応じて語法欄と語法注記を新設した。特に基本動詞，助動詞，前置詞，人称代名詞，指示代名詞，不定代名詞，数量詞，冠詞など辞書の根幹を成す語は，相互関係を重視しつつ全面的に見直し，語法欄や語法注記を充実させ，「語法に強いジーニアス」をさらに強化した。語法についてはpp.8-9で詳述されているので，そちらを参照されたい。また，類語比較欄も数を増やした。似た意味の語同士の比較を通して，語の意味・使い方の理解をより深めてほしい。

⑵表示やラベルは「見てすぐわかる」ものでなければならない。Ｇ５での主な改善点をいくつかあげてみよう。従来，用例内の見出し語は「～」で代用していたが，これをスペルアウトすることにした。また，動詞の構文表示は従来の７文型を踏襲したが，SVM，SVOMの表記をより把握しやすいようにSV 副詞(句)，SVO 副詞(句) とし，user-friendlyに徹した。

⑶コンピュータ・コーパスのおかげでより詳細なコロケーション情報が得られるようになった。これまで頻度の高いコロケーションは用例として載せていたが，数が多いと見にくくなる。そこでＧ５では日常よく使用する語については右上のようなコロケーション欄を設けて一覧性を高め，暗記しやすくした。詳しくは16ページを参照されたい。

⑷改訂版においては旧版にない新語(義)を載せることに努めるのが常である。Ｇ５では約1000の新語(義)を採用した。臨時的に使われる語(nonce word)と思われるものは避け，また無味乾燥にならぬよう，なるべく語源的な情報をつけるよう心がけた。さらに見出し語の異つづり・異表記もインターネット上の検索機関，英語辞典，コンピュータ・コーパスを用いて徹底的に見直した。

❷［the ～］（自然）**環境**《空気･水･土地･植生など》‖ the global *environment* 地球環境 / protect the *environment* from destruction 環境を破壊から守る / Using fewer chemicals in agriculture will contribute to the conservation of the *environment*. 農業において化学肥料の使用を減らすことが自然環境保全に寄与するだろう.

コロケーション＋［**動詞＋environment**］damage［harm, destroy］the *environment* 環境を破壊する / pollute the *environment* 環境を汚染する / degrade the *environment* 環境を悪化させる / threaten the *environment* 環境を脅かす / affect the *environment* 環境に影響を及ぼす / preserve［safeguard］the *environment* 環境を保護する / respect the *environment* 環境を大切にする / be concerned about the *environment* 環境に配慮する / clean up the *environment* 環境をきれ

コロケーションの例（見出し environment）

⑸巻末にカラー図版のPicture Dictionaryを付けた。文字だけでは得られない情報を視覚的に得られる。また，教室のコミュニケーション活動などで役立ててほしい。

◆おわりに

確かに，「英語の多様化・変化が激しすぎて，５年に１回程度の改訂では，紙の辞書はとてもこれに追いつけない」という指摘はある面正しい。しかし英語のコアの部分は短期間に劇的に変化しない。４，５年の周期で改訂する紙の辞書でも十分に対応できる。紙の辞書の方が，英語のコアを成す語の語義の展開，構文，語法をじっくり学べる。英語の先端的な部分の変化を知りたい人は，集合知辞典のインターネット辞書も併用すると良いだろう。様々な知の道具を活かして，英語学習に取り組んでいただきたい。Ｇ５がその一助となることを願うばかりである。

＊ Rundell, M. 2013. “Printed and digital dictionaries,” *English Teaching Professional* 86, May 2013.

（みなみで　こうせい・大阪女子大学名誉教授）

「G史上最大の改訂」again
――語義区分と訂語を見直す

中邑　光男

◆なぜ語義と訂語を見直したのか？

英単語の大まかな意味の分類が「語義」であり，その語義の中で示した日本語が「訂語」である。例えば，次のように，G 4の見出し語 selection は 4 つの語義区分からなり，1番目の語義区分には「(慎重に）選ぶこと」や「〖生〗淘汰」など5つの訂語が与えられている。

❶ U C（慎重に）**選ぶこと**，〔…に〕選ばれること〔*as, for*〕，選択，選抜；U〖生〗淘汰（とうた）

❷ C〔…から〕**選ばれた物**［人］〔*from*〕；［通例 a～］選集；精選品，極上のもの（choice）

❸ C［通例 a ～］品ぞろえ

❹ U C〔コンピュータ〕セレクション《ハイライトで強調表示されること；強調表示されたデータ》.

このように，語義と訂語は，用例と並んで，英和辞典の「心臓部」だ。今回の改訂では，これに，我々はメスを入れた。一般的にこのような辞書の心臓部を定期的にチューニングアップすることは，辞書の「地力」をさらに上げるために必要な作業である。しかし，『ジーニアス英和辞典』（以下G）の場合，この作業には特別な意味がある。この作業は，Gの「伝統」と「成長」のために必要となったものでもあるのだ。

「伝統」とは，Gが発刊されて今年で四半世紀が経ったことを指す。その間，時代の変化に応じて新語を加えたり，古くなった語義・訂語を修正・削除したりしてきた。しかしそれが徐々に蓄積され，語義や訂語を再調整する必要性が生じてきたのだ。

「成長」とは，Gが読者からの指摘を積極的に取り入れてきたことから生じている。大修館書店が発行している月刊『英語教育』連載の「Question Box」ではしばしばGに関する質問を取り上げる。辞書の利用者から送られてくる質問に対して出版元が雑誌を通じて回答を示す，という仕組みを持っているのは大修館書店だけであり，その回答を記述に反映させるのはGに許された「利点」であり，与えられた「指命」でもある。

◆どのように語義と訂語を見直したのか？

語義と訂語の見直しに当たっては，英米のEFL，ESL辞典を参考にした。特に，G 5は学習辞典であるため，*OALD*，*LDOCE*，など“big five”と呼ばれる英国系の学習辞典や，*MWALED*，*LAAD* などの米国系学習辞典を徹底的に調査・分析した。その上で，日本人学習者のニーズを念頭におき，語義や訂語を修正していった。この作業は，特にG 4のA～Cランク語の約9000語について丁寧に行った。

では，この語義区分・語義配列の検討をどのように行ったのかを，上記の selection を例にとり，説明しよう。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

G 4の selection の語義1は，「選ぶこと」と「選ばれること」を中心とし，それに「選択」や「選抜」という簡潔な訂語を補っており，適切である。しかしこのような動詞派生名詞は原則とし

て U のはずである。学習用英英辞典もこの語義は U としている。COCA などのコーパスを見ると，語義 1 は U 用法が圧倒的に多いが，不定冠詞を伴う場合も少なくない。ただし複数形の selection がこの語義を表すことはない。そこで，C よりも，［時に a ～］と示す方が正確だと判断できる。

語義 1 に「淘汰」という「専門用語」があるのは問題であろう。一般語については頻度順で語義を示すことがG 5 の全体方針であり，語義 1 には頻度の高い語義・訳語を持ってくる必要があるからだ。G 4 で語義 1 に「淘汰」を置いたのは，語義 1 の「選択，選抜」などの意味に近いためであるが，G 5 では，語義は頻度順に配列するという方針をより厳密に応用する。そこでこの語義は最後に回そう。

語義 2 は「選ばれた物・人」の意味であり，これは C の語義と考えていいだろう。G 4 の語義 2 の前半は，可算・不可算表示の適切さを含めて，問題ないと思われるが，後半の［通例 a ～］はどうだろうか。*OALD* には The orchestra played selections from Hollywood musicals. という selection が複数形の用例がある。COCA などのコーパスを調べても selections の例は少なくない。コーパスを見ると確かに a ～の用例も多いが，複数形の用例も非常に多い。ここで［通例 a ～］と示すのは危険だ。削除しよう。

語義 2 の後半にはもう一つ問題がある。訳語の「選集；精選品，極上のもの（choice）」だ。「極上のもの」には「質」の観点が入っていることが，この語義のイメージをぼんやりとさせているのではないか。selection の視点は「選ぶこと」にあるはずで，「極上のもの」を載せると，この視点がぼやける可能性がある。「極上のもの」は削除する。

このように考えると，G 5 での selection の語義・訳語は次のようになるだろう。

❶ U［時に a ～］〔…を／…のために／…として〕（慎重に）**選ぶこと**；〔…の／…のための／…としての〕**選択**，選抜〔*of*/*for*/*as*〕‖
❷ C〔…から〕**選ばれた物**［**人**］；〔…からの〕選集，精選品（choice）〔*from*〕‖
❸ C［通例単数形で］〔商品の〕品ぞろえ，選択の範囲（choice，range）〔*of*〕‖
❹ U〖生〗淘汰（とうた）.

次に，改訂した語義区分・配列や訳語に合うように，用例を再検討してみよう。G 4 の selection の語義 3 には，(1) a good［wide］selection of shellfish 豊富な品ぞろえの貝，と(2) We have a wide［good, large］selection of wine. 当店ではワインを豊富に取りそろえています，という 2 つの用例がある。各種コーパスの用例を丹念に読むと，この a wide［good, large］selection of ... はビジネス英語でしばしば使われる表現で，商店などが「商品の品揃えのよさ」をいうときにもっぱら用いられることがわかる。2 つの用例のうち，(2)はこの語句の典型的な使い方を例示しており問題はない。しかし(1)の用例は，特に必要ないだろう。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

このように，語義・訳語を再検討することは，語義・訳語だけでなく，実は，辞書の記述のほとんどを再検討することである。その再検討を，ほぼ全ページにわたって行ったのだ。その意味で，G 5 の改訂の度合いは，「ジーニアス史上最大の改訂を行った」と位置づけられたG 4 よりも，広く，深いものであったといえるだろう。このような「ジーニアス史上最大の改訂」を再び行ったG 5 が学習者に寄り添う辞書になっていることを願う。

（なかむらみつお　関西大学教授）

ネイティブスピーカーとの用例作り

畠山　利一

◆日本語話者と英語話者による合作

用例は語の意味・用法・使用の場面などを例証する極めて重要なものである。G 5 では必要なところに適切な用例が配置されるよう細心の注意を払った。

G 5 の用例は日本人とネイティブスピーカー（以後 NS）の共同作業で作られている。日本人が英文を作り，NS がチェックする場合と，日本人が語義・用法の説明をしてその語義・用法にふさわしい用例を NS が作る場合とがある。後者の場合，日本人の意図がうまく伝わらないと，用例としては使えないものができるが，うまく伝わると，とてもよい用例ができる。日本語による干渉がないので自然な英語になる。そのような用例がG 5 には多数入っている。例えば anyway の項には 5 例ある。そのうちの 2 例を引用する。やさしい英語で語義の用法を的確に示していると思う。

⑴（すでに述べたことを訂正・少し変更して）少なくとも，と言うより ‖ She was my best friend in high school. Or a good friend, *anyway* 彼女は高校生の時の最も仲のよい友だちだ．いや，少なくともよい友だちだった．

⑵それはそうとして，ともかく《◆細部は省略して，重要点を述べるときに用いる》‖ My taxi was late so I arrived late at the airport. *Anyway*, I could board the airplane. タクシーが遅れて空港に着くのが遅くなった．が，ともかく飛行機には乗れた．

◆資料とネイティブスピーカーの直観

用例を作る際にはコーパス・英英辞書・文法書など種々の資料を参考にするが，資料だけに頼らず NS の意見も参考にしている。次のような場合である。spiritual の語義 1 は下のとおり。

⑶精神的な，精神（上）の ... Kyoto is my *spiritual* home. 京都は私の心のふるさとだ．

用例にある spiritual home を *OALD*[8]は「最も幸せと感じる場所，特に自国以外の国」という趣旨の説明をしている。そうすると Kyoto を使ったG 5 の用例は不適切なのだろうか。NS の意見を聞くと ‘Spiritual home’ can be anywhere, but typically a city. とのこと。つまり市や町が心のふるさとになるのが典型的であるとの判断である。短い用例ではあるが，NS と慎重な議論を行った結果である。

用例に付ける注記にも NS の判断が入っている。通例 recommend は動名詞を目的語とし，不定詞を目的語にしないとみなされている。例えば，Turton and Heaton（1996：282）は不定詞を不可として，I wouldn’t recommend letting［×to let］your children watch it. を例としてあげている。G 4 にも同様の記述がある。

⑷ I’d *recommend* studying［×to study］English. 英語を勉強しておくといいですよ．

NS はこの文を見て，studying が普通であるが，to study も不可ではないと言う。コーパスを検索すると They never recommended to take her home. のような不定詞を目的語にする文が少数ではあるが存在する。単に × 印をつけるだけで

は不十分であると考え，「《◆まれに to study とする人もあるが，studying とするのがふつう》」と注記を付けた。

用例の主語の選択制限に NS の意見を取り入れることもある。radiate 他 ❶ はＧ４，Ｇ５でそれぞれ(5)，(6)のようになっている。下線部はＧ５で変更になった部分である（以下同）。

(5) 〈人が〉〈喜びなど〉をまき散らす，発散させる…‖ Her face *radiated* optimism. 彼女の顔からは楽天的な様子があふれ出ていた。

(6) 〈人・顔などが〉〈喜びなど〉をまき散らす，発散させる‖ She［Her face］*radiated* optimism.

LDOCE[6]でこの語義に該当する部分は if someone radiates a feeling, ... it is very easy to see that this is how they feel : *He radiated calm confidence*. となっている。someone が使われているので主語は〈人〉のようである。用例も〈人〉が主語になっている。*OALD*[8]など他の学習英英辞典でも同様に主語は〈人〉である。そうすると Her face を主語にしたＧ４の用例は書き換えるべきだろうか。そこで上のＧ５用例を NS に見せて意見を聞くとどちらも OK という返事である。コーパスには Her face radiated total self-confidence. など face を主語にする文も見つかる。主語の選択制限は〈人〉とは限らないことが明らかになったので，Ｇ５に反映させた。

◆文型・連語を例示する用例

Ｇ５ではこれまで用例が付いていなかった重要な語義に，可能な限り用例を付け加えている。recommend の語義２には次を追加した。

(7) It is *recommended* that adults sleep around eight hours. 大人は約８時間寝ることが奨励されている。

語義と文型は「［It is ～ed that 節］…ということが奨励されている」としてＧ４で既に記されていたが，用例はなかった。この用例によって利用者は用法をよりはっきりと知ることができるだろう。なお，この用例は文型に合うように NS が作成したものである。

連語についてもできるだけ用例で示した。Ｇ４ trial 名 ❶ に「〔犯罪などに対する〕裁判，公判，審理〔*for*〕」の語義がある。連語として for を示しているが，用例には for を使ったものはない。この語がＢランク（高校学習語）であることを考慮すると，for 句を入れておくほうが user-friendly になる。既存用例に手を入れて，

(8) bring him to *trial* for robbery = bring him up for *trial* for robbery = put him on *trial* for robbery 彼を強盗容疑で裁判にかける

とした。

上は前置詞の連語に関するものであるが，副詞辞についても同様の処置をした。trip 自 ❶ の語義「〔…に〕つまずく，つまずいて倒れる…（＋*up*）〔*on*, *over*〕」の中の「（＋*up*）」は副詞辞 up を伴う場合もあることを表示したものである。用例を次のように加筆した。

(9) He *tripped* (up) over［on］a root and fell. 彼は木の根につまずいて倒れた。

このような細部にも目を向け，追加はすべて NS によるチェックを受けている。コーパスを検索するだけではこのような表現が可能かどうかの判断は困難だったであろう。

◆おわりに

英和辞典の用例チェックは日本語話者が作った英文を NS が点検をして誤りを直すという方法が一般的ではないだろうか。Ｇ５では日本語話者と NS が協同して用例を作るという斬新な方法を採用することによって，用例が自然で使いやすいものに一新された。

参考文献　Turton, N. D. and J. B. Heaton. 1996. *Longman Dictionary of Common Errors*. New Edition.

（はたけやま　としかず・大阪国際大学名誉教授）

G５の語法記述はこう変わった

柏野　健次

語法研究は英語教育と直結している。研究の成果がそのまま明日の授業にも使えるからである。

私は英語教育においては，「間違って教えられたことを繰り返して教えない」というのが大テーゼだと考えるが，このテーゼを守るためには，「英語をもっとよく知る」「英語の変化に気づく」という観点からの語法研究が必要不可欠である。

G４の語法欄を改訂するに当たってこの３点を常に心がけたが，以下では１項目ずつ，その具体例を挙げていきたい。

◆英語をもっとよく知る

まず，「…から」という意味を表す since と from の違いについて考えてみよう。

一般に from は since とは異なり「正確な特定の時」を表す語句を伴う場合には現在完了形では用いられないと言われる。

(1) I have been here *since* [×from] five o'clock.

ここで from を使うには I was here *from* five o'clock (and later I left). のように過去時制を用いなければならない。

ただし，漠然とした時を表す語句と用いられる場合には from の使用も可能となる。

(2) I have known him *from* my childhood.

(3) *From* the day I married her, she has never called me by my first name.

(2)はよく知られた言い方だが，(3)のような語法はあまり知られていないのではないだろうか。

【→G５，from 語法】

次に，代名詞の it と one の使い方の違いについて触れてみたい。

一般に，「the ＋名詞」は it で，「a(n)＋名詞」は one で受けると言われている。これは基本的に正しいが，「a(n)＋名詞」が特定性を表す場合があり，その時には it［he，him など］が用いられるという事実を知っておく必要がある。

(4) A boy came running toward me. *He* [The boy] was breathless.

特に want, look for などの動詞(句)に「a(n)＋名詞」が後続する場合には，特定性についてあいまいになり，文脈により one でも it［he，him など］でも受けることができるが，こういう情報も貴重である。

例えば，次の(5)は特定の男性を念頭に置いての発言ではないので one で呼応し，(6)では特定の男性の存在が前提となっていて，その人を頭に浮かべての発言なので he で呼応している。

(5) She wants to marry a tall handsome man if she can find *one* [×him].

(6) She wants to marry a tall handsome man: *he* lives in Tokyo.

【→G５，a / one】

◆英語の変化に気づく

この語法の変化の例としては recently と lately が適切だろう。

recently は「現在より少し前のある時に起きた一回限りの行為」に言及するので，通例，現在完了形（完了・結果用法）か過去時制と共に用い

る。ところが，以下に見るように時に recently を現在時制と共に用いる人がいる。ただ，今のところは使わない方が無難である。

(7) ×Recently, I go to church.

(8) ×She is recently divorced.

(7)では these days か nowadays を使い，(8)は She got divorced recently. と言うのがふつうである。

また，recently を lately と区別しないで，次のような使い方をする人がかなり増えてきている。ともに本来は lately が正しいが，これは確立した語法として認めざるを得ないだろう。

(9) I have been feeling much better *lately* [*recently*].

(10) I've seen a lot of them *lately* [*recently*].

lately は「少し前から現在までの間に継続している行為か反復されている行為」に言及し，時間的には recently よりも現在に接近していて，通例，現在完了形（継続用法）か現在完了進行形と共に用いられる。ところが，時に lately を過去時制と共に用いる人がいる。ただ，英語学習者としては recently を使っておくのが賢明だろう。

(11) ×She had a baby lately.

また，lately を recently や these days と区別しないで，次のような使い方をする人がかなり増えてきている。これは確立した語法として認めてもよいと思われる。

(12) I have returned from Canada *lately* [*recently*].

(13) She is looking good *lately* [*these days*].

以上は肯定文の場合であったが，否定文や疑問文では recently と lately はほぼ同義で用いられることが多い。これも見逃せない事実である。

(14) I haven't eaten at the restaurant *recently* [*lately*].

(15) Have you seen any movies *lately* [*recently*]?

【→G 5，recently 語法 ／ lately 語法】

◆間違って教えられたことを繰り返して教えない

この具体例として，ここ数年の間に学生から出された質問を２つ取り上げることにしたい。

Q 1　関係詞の先行詞は限定されているから必ず the がつくのでは？

これは正しくない。関係詞の先行詞の冠詞に関しては，一般に言われている a(n) と the の区別が適用できる。つまり，簡略化して言えば，a(n) に続く名詞は「複数存在するものの１人［１つ］」を表し，the に続く名詞は「１人［１つ］しか(い)ない」ことを表す，ということである。

次の(16)では「ベンは不平ばかり言うタイプの人間のうちの１人である」ことが述べられ，(17)では「オバマ大統領の生まれた都市」は当然１つなので the が用いられている。

(16) Ben is *a* man who is always complaining about something.

(17) Honolulu is *the* city where President Obama was born.

なお，前述の it と one の問題に関連して言えば，次の(18)の先行詞 a computer は文脈により特定の１台のコンピュータを指すので，buy の目的語には one ではなく，it を使うことになる。

(18) Sue saw *a* computer that she liked and bought *it* [×one].

【→G 5，that³ 語法】

Q 2　未来を表す進行形で使える動詞は往来発着の意味の動詞だけでは？

これも誤解である。確かに往来発着の動詞が多いことは否めないが，次のように未来を表す副詞(句)を伴えば他の動詞でもまったく問題はない。

(19) I'*m having* dinner with him tonight.

(20) What *are* you *doing* this summer?

【→G 5，be】

このような質問を受けるたびに，まだまだ私が習った頃の英語が教えられていると実感する。

（かしの　けんじ・大阪樟蔭女子大学名誉教授）

Question BoxからG５へ
――愛用者のみなさんとともに

原川　博善

◆辞書は愛用者に育てられる

辞書を愛用してくださる方々から寄せられるご質問，提言等によって記述上の思わぬ不備や誤りを是正する機会が与えられ常々感謝しております。

ここではG４についてご指摘をうけた項目で『英語教育』Question Box 欄において回答した中から今回G５に反映したものをいくつか取り上げてご報告します。

◆日本語「の」と関連して

「K大学の学生」は a student at K University のようにふつう前置詞は at で，「の」に引かれて of としないよう各英和辞典で注記しています。しかし，あるライティングのテキストに We are proud of being students of this school. とあるが，この of は正しいかとの質問がありました。

of は次の文のように「所属」を表す場合に適切な前置詞です。

Once you become a student <u>of</u> the University of Ulster, you automatically become a member of the Students' Union.（アルスター大学に入学すると自動的に学生会館の会員となります）――BNC（下線は筆者；以下同じ）

上記の文では at も可能ですが，be proud of being の表現に生徒の学校への帰属感が表れていて of が使われたと考えられます。

これをふまえて，G５では a *student* <u>at</u> Oxford University（オックスフォード大学の学生）のほかに a former *student* <u>of</u> Prof. Brown（ブラウン教授の（下で学んだ）元学生）のような「所属」を表す of の例を挙げることで疑問に応えることができると考えました。

つぎに，「スージーの友だち（のひとり）」は，Susie's friend, a friend of Susie's,「スージーと友だち」は a friend of Susie, friends with Susie のように表せます。特に区別しない場合 a friend of Susie と a friend of Susie's では，後者の二重属格（of Susie's）の方が of 属格（of Susie）より一般的とされます。しかし，of 句が２語以上になると逆に of 属格の頻度が高いという調査結果があります（*Longman Grammar of Spoken and Written English*, pp. 308 and 310）。COCA でも確認しましたが，特に３語以上ではほとんど a friend of defendant Peg Millett のような of 属格表現となっています。

そこでG５では次のような記述となりました。

I am「a *friend* of Susie('s)［friends with Susie］. 私はスージーと仲よしです《◆'s をつけるほうがふつう．a *friend* of Susan Jackson のように of 句が２語（以上）では's をつけない方がふつう》

LGSWE（p.310）は，二重属格は旧情報を，of 属格は新情報を担う傾向にあることを指摘していますが，そこまで詳しくは触れませんでした。

◆動詞 thank が that 節を従えるとき

動詞 thank は目的語に God，goodness，heaven が来る時，that 節をとることがあるよう

だがそのほかの目的語もあるか，という趣旨の質問がありました。

確かに you，him などを目的語にとることもありますが多くの場合 God を指しており，祈り・感謝の表現として使われています。

Lord, we thank you that your word is true.（主よ，み言葉の真なることを感謝いたします）——COCA

このように thank が that 節を伴う型は使用される文脈が限られているため，一般に辞書では that 節を明示していません。

Thank God［goodness, etc.］が，ふつう間投詞として文の前，時に後ろで使われますので，G 5 では語義に加えて次のような例文を付し，that 節については注記しました。

Thank God［goodness, heaven(s), the Lord, Christ］(for O)!《略式》［喜び・安堵を表して］（…とは）ありがたい，ああ助かった，しめた．‖ *Thank God,* you're back. ああよかった，君が帰ってきてくれて《◆ that 節や主語を表すこともある‖ *Thank God*［I *thank God*］that mother is doing well. 母が順調に回復しているのがありがたい》/ *Thank God for* that. それはよかった．

◆語義の拡充

thanks to O は，日本語の「…のおかげで」と同じく，本来の意味とは逆に「…のせいで」を表すことがあります。G 4 では［時に皮肉を込めて］…のおかげで；…のために《◆主節の事柄が起こった経緯を述べる》となっていましたが，G 5 では，否定的語意を明確にするために「…のために」に代えて，「…のせいで」としました。

これと似た例として A, if not B の表現があります。この表現は本来譲歩的な意味で，「たとえ B でなくても A（以上）だ」…(a)と解釈されます。次の例はこれにあたります。

She understood his meaning, if not his words, and took his advice.（彼が言う言葉はともかく，その意味するところを理解して，彼女は助言に従った）—— *COBUILD*[5]

これに加えて現在では「A である，いや B かもしれない」…(b)の意で多く用いられています。

They cost thousands if not millions of pounds to build.（それらを建設するには何千ポンドおそらくは何百万ポンドも費用がかかった）—— *OALD*[8]

米国の *MWALED* は，(a)，(b)両方の語義を認めていますが，英国では *COBUILD*[5] は(a)のみ，*OALD*[8] は第 6 版（2000）以降(b)のみの記載となっています。(a)，(b)のいずれの意味であるかは，文脈や表記された場合のコンマの有無，発話された場合の音調の違いなどとも関係します。

G 5 では(b)の語義を加えて次のようになりました。

(2)［A, if not B で］《◆ A と B は形容詞・副詞・名詞》B でないとしても（少なくとも）A ‖ Jim was very uncomfortable about, *if not* afraid of, seeing her again. ジムはもう一度彼女に会うことを恐がってはいないまでも少なくともとても気まずいと思っていた．

(3)［A, if not B で］（確かに）A いや（もっと）B かもしれない‖ The concept is difficult, *if not* impossible, to understand. その概念を理解するのは難しい，いや不可能かもしれない．

（はらかわ　ひろよし・元平安女学院大学短期大学部教授）

英語学習とＧ５

須賀　廣

Ｇ５の編集にあたっては，主たるユーザーである高校生に本当に大切な情報を提供することを心がけた。ここではその一端を紹介したい。

私は中学校で２年間，高等学校で36年間，英語教師として毎日教壇で炭酸カルシウム（チョーク）の粉を浴びながら，「白墨人生」を送った。その間，英語教育法には実に様々な「流行」があった。

いったい，何が変わり何が変わらなかったのか。英語で意思疎通ができるとはどういうことか。38年間の経験から言えるのは，当たり前の結論である。必要十分な語彙と文法能力を持ち，こちらに「言うべきもの」があれば，必ずコミュニケーションが成り立つ。あとは時にネイティブスピーカーと会話のキャッチボールをすればよい。会話を深めていくためにはそのテーマについての知識や自分なりの意見を持っていないといけない。うわべだけの会話表現だけでは，すぐに底をついてしまい，会話はとぎれる。

結局は，「極端に走るな」ということだ。それぞれがそれなりに存在意義を持っている。過去の英語教育は流行を追うばかりで，いずれも思ったほどの成果が出なかった。日本の英語教育が今後成果を出すためには，今一度，これまでの英語教育法を見直して，それぞれのメリットやデメリットを洗い直すことだろう。文法も必要，訳読も必要，そしてもちろんコミュニケーション能力も必要ということだ。

■訳文へのこだわり

Ｇ５では，英語だけでなく，日本語もできるだけ自然で，高校生が理解しやすいものになるように工夫した。

例えば，Ｇ４では，

trade 動 ⓐ ❹〔相手と〕交換する〔with〕‖ If you prefer my gift, I'll ～ with you. ぼくの贈り物の方が気に入っているのなら，君のと交換するよ．

となっている（以降，Ｇ４・Ｇ５からの引用は語義・用例を主に示す，下線は筆者）。しかし，これでは「ぼくの贈り物」が「ぼくがもらった贈り物」なのか，「ぼくが人にあげようとしている贈り物」なのかがはっきりしない。そこでＧ５では「ぼくのもらった贈り物の方が気に入っているのなら，君のと交換するよ」に変えてその点を明確にした。

■頻度の重視

同様の表現が複数見られる場合は，使用頻度の多いものを優先した。例えば，Ｇ４の名詞 touch の語義２では，

touch 名 ❷ Ⓒ Ⓤ …（仕上げのための）加筆‖ I have to put［add］the finishing［final］～es to this painting. この絵を仕上げるのに少し筆を入れなければならない．

となっていた。１つの文中に言い換え可能の情報を２つも入れることは，情報量が多すぎてかえって見づらい。そもそもこれら２つの言い換え表現は同程度によく用いられているのだろうか。例えば Google では，それぞれの使用頻度は次の通りだった。

put the finishing touches to → 約330万例
put the final touches to → 約40万例
add the finishing touches to → 約200万例
add the final touches to → 約30万例

つまり，put を用いても add を用いても大差はないが，finishing と final では，その使用頻度に大きな差が見られる。この傾向は COCA 等のコーパスにも見られた。そこでＧ５では，finishing の入れ替え表現である［final］を思いきって削除し，

I have to **put** [add] **the finishing touches** to this painting.

と表記することで，頻度の高い表現を残し，すっきりとした用例にした。このようにＧ５では，用例などを記述する場合，できる限りその使用頻度をチェックし，頻度の高いものを優先するようにしている。

■異文化に関する注記の充実

文化の違いによく注意しないと，思わぬ誤解が生じてしまうことがある。例えば，Ｇ４では wind[1]名の分離複合語に，「～ chimes（ガラス・金属製の）風鈴.」が載っている。これを見ると，ほとんどの日本の高校生は，鉄製や陶器製の小さな釣鐘状のものから細長い紙が垂れている日本式の風鈴を思い浮かべるだろう。しかし西洋の風鈴はそれと全く形状が異なる。「風鈴」に当たる英語が，wind chime ではなく，wind chimes と複数形になっているところに注意してほしい。西洋の一般的な風鈴は，鉄製（ガラス製・木製もある）の円筒状の棒が何本もぶら下がっていて，風が吹くと中央にある重りが周囲の棒に当たって音色を出す。こうした違いを理解するには，上記の語義だけでは不十分である。そこでＧ５では次のような注記を設けた。

～ chimes（金属・木製などの）風鈴《複数の円筒などに重りが当たって音を出すものが多い》.

■ネイティブスピーカーによるチェック

語義に適切な用例をつけることは辞書編纂で重要な作業の一つである。しかし，短かくてしかも状況を瞬時に把握できる用例を作ることは至難の業である。また作成した用例が，ネイティブスピーカーが見て自然な英語でないといけない。これまでもそうだが，Ｇ５の用例はすべて信頼できるネイティブスピーカーのチェックを受けている。

例えば，cost 名の項で，次のような例文を作成した。

It is necessary to protect the environment whatever the cost.

すると，ネイティブスピーカーはこれを次のように訂正した。

Whatever the *cost*, we must protect the environment.

もとの用例は文法的には問題ないが，全体として「弱すぎる」というのだ。whatever the cost という成句はもっと強制力のある文の中で用いる方が自然らしい。

高校生は，英文を読む途中でわからない単語に出会ったときに，Ｇ５を引く。そしてそこにまさに望んでいた訳語や用例が載っている――そのような辞書になるように努力した。また，英和辞典は未知の単語を引くためにだけあるのではない。時間があるときには，辞書を拾い読みするのもまた楽しい。読むたびに新たな発見がある。私たちの世代は，紙の辞書を引き，赤ペンで下線を入れ，しだいにどのページもピンク色に染まっていくのを見て，自らの英語力の進歩を自覚した。辞書を使い込み，手になじんでくるにつれて，紙と紙の摩擦が取れ，片手の指一本で一枚一枚をめくることができるようになっていくことに喜びを感じた。日頃英語と格闘している高校生にこそ，このＧ５を片手に，英語の海へと漕ぎ出していただきたい。

（すが　ひろし・川崎医療福祉大学学生課）

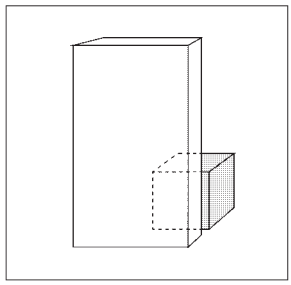
広がるつながる意味ネットワーク
――前置詞多義語の理解から発信型の学習へ

鎌倉　義士

『ジーニアス英和辞典 第５版』（Ｇ５）では，前置詞についてもすべての語義と用例の記述を徹底的に見直し，英語学やコーパスを基に，新たな言語事実も盛り込むことで有益な語法情報を充実させた。前置詞での最大の変更は，認知言語学の知見を取り入れ意味ネットワークを新たに導入したことである。Ｇ４においても語義展開図の名称で前置詞の特性である多数の意味を理解しやすいよう提示されていたが，Ｇ５ではその考えを更に進化させた。意味ネットワークの利点は，前置詞の基本義である位置・場所の意味から時を表す意味へ，さらに抽象的な意味への展開を明確に示せる点である。これにより，まず基本義をおさえ，中心的な語義から多数の語義がどのように展開していくのかを関連づけて前置詞の意味を把握することができる。

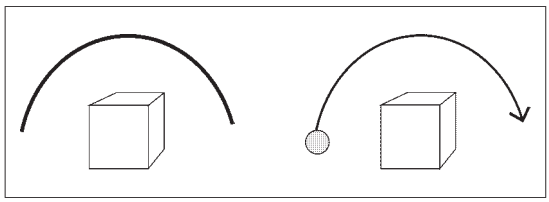
前置詞の基本義は簡易な図で示すことが可能である。Ｇ４から継続して前置詞イメージ図は，注意が向けられる対象物とその背景になるものの二者の関係を表し，必要なものには対象物の動きを記している。英語の文において，対象物とは前置詞（句）の前方に位置する名詞を指し，対して背景となるものは前置詞の後方に位置する名詞を示す。これら２つで構成された関係が，位置・場所の意味から抽象的な意味まで共通する基本的なイメージであることを図と意味ネットワークで示している。すなわち，辞書利用者がイメージ図を見て語の基本イメージを捉え，それがどのように発展していくかを意味ネットワークで確認できるようＧ５の主要な前置詞は構成されている。

◆イメージ図

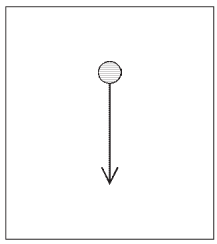


前置詞の基本義を理解するのにイメージ図は重要である。Ｇ５では細部により注意を払い，図を完成させた。右図 behind では後ろに隠れるイメージを明確にするため，対象物のうち後方に位置する部分を点線で表示し改善した。

over に関しては２種類のイメージ図を用意した（下図）。over は認知言語学において長年研究されており，静的と動的な意味の両方が意味ネットワークの中心点として重要な役割を果たす。複数のイメージ図によって意味の広がりの起点となる基本義を視覚的に提示した。



副詞の図にも改訂を加えた。下図は副詞 down のイメージ図である。down や up などは前置詞より副詞の用法が一般的である。その点を考慮し，down には対象物と動きのみで構成された副詞のイメージ図も加えて提示した。前置詞と副詞それぞれのイメージを併記し，学習者によりよく理解してもらう目的の変更である。



◆意味ネットワーク

前置詞の正確な意味の理解と的確な使用には，複数の意味にわたる全体像を知ることが不可欠である。例えば，次の 2 つの文で at と in は共に場所を指す前置詞である：Kent works at the market. / He lived in England. 私の研究と指導経験によると，日本人英語学習者は場所を指す前置詞に in を過剰使用する傾向がある。これは，at が一点を指すのに対し，in は空間を指すという基本イメージを把握していないことが原因である。

このように学習が難しい前置詞の意味の違いを理解し，正確に使い分ける手助けとなるよう意味ネットワークを考案した。その根幹となる考えは認知言語学の知見に基づく。具体的には，前置詞の意味が「位置(場所)→時→抽象的意味」へと発展することであり，全ての前置詞意味ネットワークにおいて原則的にこの提示順を徹底している。代表例として before のネットワークを見る。

■ before
【基本義：…より前に】
…の前に【位置】(前❸)
- …よりも前に【時】(前❶ a)
- …よりも前に【順序】(前❷ a)
  - …に優先して(前❷ b)
  - …よりまさって(前❷ c)

before の中心になる意味として位置の意味である「…の前に」を最初に提示し，続いて時を示す「…よりも前に」，そして順序を意味する「…より前に」で意味ネットワークは構成されている。これは位置の意味から始まり，時間軸における位置として時の意味が続き，その後，抽象的な順序の意味へと発展することを示す意図による。

またＧ５の意味ネットワークでは，前置詞の意味の全体像をつかみやすいよう基本義から抽象的な意味への発展を明確にしたことに加え，周辺にある抽象的意味から中心にある基本義を帰納的にも再確認できるよう構成した。例えば，at のネットワークの第１層にある「…に向かって」の意味は一点を目標とする「…をねらって」の意味へとつながる。同様に，数直線の一点を指す意味から限界点を示す at や「…の点で」へのつながりを知れば対象の一点を示す at を理解しやすくなると考え，ネットワーク上に配置した。

■ at
【基本義：場としての一点】
…に，…で【地点・場所】(前❶)
- …に【時間】(前❷ a)
  - 【順序・回数】(前❷ b)
- …に向かって【目標】(前❸ a)
  - …をねらって(前❹ a)
  - …を見て(前❺ a)
- …で【数直線の一点】(前❻)
  - 【極限・限界】(前❼)
  - …の点で，…に関して(前❽)
- …をしている【存在】(前❾)
  - …で【所属】(前❿)
  - …で【状態】(前⓫ a)

副詞の down，up にも新たに意味ネットワークを作成した。その理由は，前置詞と同様に位置的意味から抽象的意味への発展が見られるからである。down の意味ネットワークにおいては，意味的な特性をふまえた特別な構成として基本義から想像し難い意味をネットワークの第１層に配置するようにした。「下に」の意味から「完全に」「抑えつけて」の意味は関連づけることが難しいと思われる。それらを代表的な語義として提示することで，その下層に位置する抽象的な意味の「すっかり」「しっかり」や「休止」「黙って」への意味拡張を明確にすることを試みた。

■ down
下へ【移動】(副❶ a)
- 下に【静止】(副❶ b)
  - 姿勢を低くして(副❷)
  - 書き留めて(副❻)
- 離れて，すぐそこに【場所】(副❹)
- 下がって【量】(副❺ a)
  - 減じて(副❺ b)
- 完全に(副❿)
  - すっかり崩れ落ちて(副❿ a)
  - すっかりきれいに(副❿ b)
  - しっかりと固定して(副❿ c)
- 抑えつけて(副⓫)
  - 休止の状態に(副⓬)
  - 黙った状態に(副⓭)

意味の理解は，「聞く・読む」の受信的技能のみで必要とされるものでなく，「話す・書く」の発信的技能でも欠かせない知識である。基本義から抽象的意味への発展の道筋を意味ネットワークで視覚的に提供することが，Ｇ５を利用する英語学習者の積極的な英語での発信に貢献することを大いに期待する。（かまくら　よしひと・愛知大学准教授）

英語のチャンク事始め：「コロケーション＋（プラス）」

中邑　光男

コロケーションとは「各言語に特有な単語同士の結びつき」を指す。例えば「野球する」は play baseball だが，「柔道する」は×play judo ではなく do judo という。この play baseball や do judo が正しいコロケーションである。

G 4 まではコロケーションを用例中の太字で示してきたが，G 5 では「コロケーション＋」欄も設け，英語表現において重要な語のコロケーションを積極的に取り上げた。重要な語とは，①学校，②社会生活，③情報技術，④身体関連のことばである。例えば「社会生活」に関連しては，見出し語 job で，「a **permanent**［temporary］**job** 常勤［臨時］の職」などの用例を示すだけでなく，コロケーション欄において，「動詞＋job」（例：have a job 職に就いている，仕事をしている／create jobs 雇用を創出する）や「名詞／形容詞＋job」（例：a decent job まともな仕事）を挙げた。コロケーションを示した語には，job 以外にも，appointment，class，company，computer，e-mail，family，Internet，memory，mistake，money，plan，price などがある。

では学習者はG 5 のコロケーション情報を見て，何を学ぶことができるのだろうか。第 1 に，身近なものごとについての表現を，ことばのかたまり（チャンク）として頭に入れることができるだろう。例えば，学習者は「私の英語の成績」の意味で，×my grades of English という間違った英語を使いがちだ。しかし，「コロケーション＋」欄を参考にすることにより，my English grades や my grades in English という正しい英語を使うことが可能になる。さらに，「数学の成績」なども自信を持って英語で表現できるだろう。

第 2 に，学習者はコロケーションに触れることにより，日本語と切り離された「英語の世界」を味わうことができるだろう。例えば「面接を受ける」が get an interview であり，「面接をする」が give O an interview だと知れば，get や give の目的語が，「手渡しできるような物」だけではないとわかるだろう。「面接を give［get］する」という表現は，日本語だけを見ていては口から出てくるものではない。コロケーションに多く触れることで，学習者は英語の感覚をさらにみがくことができるだろう。

第 3 に，隣り合う語をまとめて見ることによって，語のイメージを膨らませることができるだろう。多くの学習者は environment という語を見ると「自然環境」を思い出すに違いない。しかし environment のコロケーションには，an office environment「オフィス環境」，a living environment「居住環境」などがあり，environment が「自然環境」より広いイメージの語であることが分かるはずだ。

G 5 では，このような英語学習上役に立つ「コロケーション＋」欄を，ジーニアスファミリーとして初めて採用した。なお，自然な英語のコロケーションには，自然な日本語のコロケーションを使った訳語がふさわしい。G 5 では，日本語コーパスを使い，この点についても最大限の注意を払ったことを付け加えておく。

（なかむら　みつお・関西大学教授）

Genius ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY 5th Edition

Will you ...? / Would you ...?は依頼表現か

柏野　健次

G 4の助動詞の項を改訂するにあたって，まず考えたのは，私の研究の成果をどこにどの程度盛り込むかであった。本稿ではその実践例の1つとしていわゆる「依頼」表現を取り上げてみたい。

助動詞を用いた「依頼」表現には次の4通りがあると言われている。

(1) a. Will you ...?　　b. Would you ...?

(2) a. Can you ...?　　b. Could you ...?

私見では(2)は依頼を表すが，(1)は依頼ではなく指示を表す言い方である。指示と依頼の違いは言われた人が「断りにくいか」((1)のタイプ)「断りやすいか」((2)のタイプ）という点に求められる。(1)のタイプは立場が上の人が下の者に職務上の指示を与える場合に用いられ，(2)のタイプは個人同士（例えば友人間，あるいは見知らぬ人に対して）の依頼に用いられることが多い。

(3) Will you book me another flight?
［上司から秘書へ］

(4) Would you make me a cup of coffee?
［主人からメイドへの指示］

(5) Can you do me a favor?
［友人に対しての依頼］

(6) Excuse me, could you press four, please?
［エレベーターで見知らぬ人に］

ただし，社会的立場が逆転していても職務上頼む権利のある事柄であれば(1)のタイプが使える。

(7) Will you fasten your seatbelt, please?
［立場は運賃を払っている乗客の方が上］

私のこの主張は同タイトルの拙論（『英語教育』1996年8月号）に基づいているが，その後，出版されたJ. M. バーダマン著『ネイティブが許せない日本人がかならず間違える英語』（中経出版，2009）でもこの問題が扱われている（p.112)。私なりに要点を整理すると以下のようになる。

a. 頼みごとをする時には，最初にCan［Could］you ...? を用いて相手にその行為をするのが可能かどうかを尋ね，次にWill［Would］you ...? を用いてその行為をしてくれる意志があるかどうかを尋ねる。それがマナーである。

b. 好ましい表現から先に並べると，Could you ...? → Can you ...? → Would you ...? → Will you ...? のようになる。

ここでは特に，Will you ...? はWill you please shut up! に見られるように時に強い命令を表すこともあり，またWould you ...? も言い方はソフトではあるが，実質的には「ていねいな命令」(＝指示)であるという点を強調しておきたい。

以上の考察を踏まえた上で，G 5のcouldの項では「指示」「依頼」という用語を取り入れ，「ていねいさの度合い」を設けて次のように改訂した。

> **語法** (1) …ていねいさの度合いはおおよそ，Could you ...? ＞ Can you ...? ＞ Would you ...? ＞ Will you ...? となる．Could you ...? とCan you ...? は依頼表現で，聞き手はNoと断れるが，Would you ...? とWill you ...? は指示表現で，断りにくい。

（かしの　けんじ・大阪樟蔭女子大学名誉教授）

G５の発音表記の特色
―新しい英音表記と「聞こえ方」の注記

南條　健助

私は，改訂版（1993）以来，20年以上にわたって『ジーニアス英和辞典』の発音表記を担当してきました。その間，一貫して「日常会話でしばしば耳にするくだけた発音も含め，今日英米で実際に使用されている最新かつ一般的な発音を正確に表記する」という方針を採ってきました。発音表記は，第４版（2006）において初版（1987）以来最大の改訂を行いましたので，今回の改訂は比較的小規模なものとなりましたが，第５版（Ｇ５）の新機軸として，

⑴ 日本の英和辞典として初めて英音の/ɒ/という発音記号を採用した。

⑵ 他書ではほとんど触れられていない日本人学習者がリスニングで苦手とする母音の変化を「聞こえ方」の注記として盛り込んだ。

という２点を挙げることができます。もう少し詳しくご紹介します。

◆英音の/ɒ/の記号を採用

従来，日本の英和辞典は，law や talk の母音には/ɔ:/の記号を，lot や dog の英音の母音には/ɔ/の記号を使用してきました。しかし，このような表記は，あたかも２つの母音の音質は同一であり，両者は長短の差によってのみ区別されるという誤解を与える可能性が高く，音声学者の間では以前から問題視されてきました。一方，英国では1960年代から lot や dog の母音に/ɒ/の記号が使用され始め，law や talk の/ɔ:/とは，長短だけではなく，音質も違うことが明示されるようになりました。今や/ɒ/の記号は，英音の発音表記における事実上の世界標準となっています。Ｇ５は，日本の英和辞典として初めて/ɒ/の記号を採用し，これによって英国で出版されている全ての学習英英辞典とほぼ同一の発音表記体系となりました（bird や work の/ɜ:/の記号［Ｇ５では/ə:/］を除く）。

このほか，この８年の間に急激に変化した英音の実態を反映して，「発音記号表への注」を改訂し，すでに今日の英国で主流となっている最新の発音を表記しました。

◆「聞こえ方」の注記の導入

日本人学習者がリスニングで苦手とする母音の変化として，特に米音において，/l/の前にある/ʌ/が，しばしば「オ」に近い響きになる現象があります。実際，教室でリスニングの指導をしていると，result を resort と聞き間違えたり，Gulf War を Golf War と聞き間違えたりする学習者が目立ちます。また，dull が［ドウ］のように聞こえて，聞き取れない学習者が多数います。

この現象は日本人学習者の弱点の一つですが，英語の発音やリスニングの教材では，これまでほとんど取り上げられてきませんでした。そこで，Ｇ５では，使用頻度の高い重要語を中心に，

dull《◆特に《米》ではしばしば/dʌ́l/のように聞こえる》

のような「聞こえ方」の注記を随所に入れました。リスニングの指導に役立てていただければ幸いです。

（なんじょう　けんすけ・桃山学院大学国際教養学部准教授）

Genius ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY 5th Edition

新しいから新語，旧知だけど新語

森口　稔

国語辞典の２人の先達，見坊豪紀と山田忠雄の友情と決別を描いた，佐々木健一『辞書になった男』（文藝春秋）は，新語についての見坊氏の話を紹介している。

「長年の用例採集の実績から，ケンボー先生は大体，平均して一日に三つは新語が生まれると話していた。」（表記は原文通り）

日本語と英語を単純に比較することはできないが，2006年に出版された『ジーニアス英和辞典』第４版から約８年。仮に英語でも１日に３語が生まれるとすると，今回の第５版が出版されるまでの間に9,000語近くの新語が誕生したことになる。

では，なぜこんなに次々と新しい語が生まれるのか。その理由はおおまかに２つあるのではないかと考える。

１つは，新しい事物。それまで存在しなかった事物が発明・発見されたり，他の文化から導入されたりしたとき，それを指す言葉やそれに関連する言葉が生まれる。1980年代半ばまで Internet という語は存在しなかったし，西洋が日本文化と接触する前は soy という英単語もなかっただろう。第４版以降の目まぐるしい社会の変化が，第５版に掲載された新語に現れている。

たとえば，ring と anxiety から合成された単語 ringxiety。混雑した車内で電話の呼び出し音が聞こえたとき，自分の携帯やスマホが鳴っているのではないかと思うときがある。そのときの不安と期待と羞恥が入り混じったような感覚。「着信不安，着信願望」と訳してみた。voice lift。近頃，顔のしわをなくすリフトというプチ整形が女性の間で話題になっているらしい。見た目だけではなく，声も若くしたいということだろうか。「声帯の若返り手術」という訳を与えている。

新語が生まれるもう１つの状況は，事物自体はしばらく前から存在しているにもかかわらず，それに名前がついていない場合である。

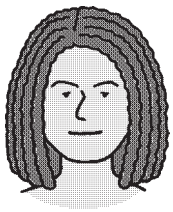
たとえば，「無理」とか「嫌だ」と文句を言いながらも，最終的には，困難な仕事をなんとかこなしている人たちがいる。この優秀なのか不平家なのかわからない人たちのことを最近の英語では stress puppy と呼ぶらしい。

恥ずかしかったり，がっかりしたとき自然と手で顔を覆ってしまう。これは日本文化だけではないようだ。おそらくは大昔からやってきたその行為を１語で表す新語が出てきた。face と palm の合成語，facepalm。単純すぎて，なぜ今までこの単語がなかったのか，不思議に思えるほどである。

１日に３語の新しい言葉が生まれているとしても，それらがすべて生き残るわけではない。生まれてすぐに死んでいく語もあれば，華々しくデビューした後に一瞬で消えていくような語もあるだろう。その中で生き残り，社会に認知され始めている単語たちを今回は収録したことになる。単語が生まれて辞書に載るまでは，人間に譬えれば，幼児期から学生時代を経て社会に出るまでの時期のようなものだろうか。立派な社会人として，それぞれの単語を世に送り出す。その卒業証書を渡す役割を果たすのが辞書なのかもしれない。

（もりぐち　みのる・長浜バイオ大学非常勤講師）

コトバからモノへ，モノからコトバへ
～Picture Dictionary の使いかた



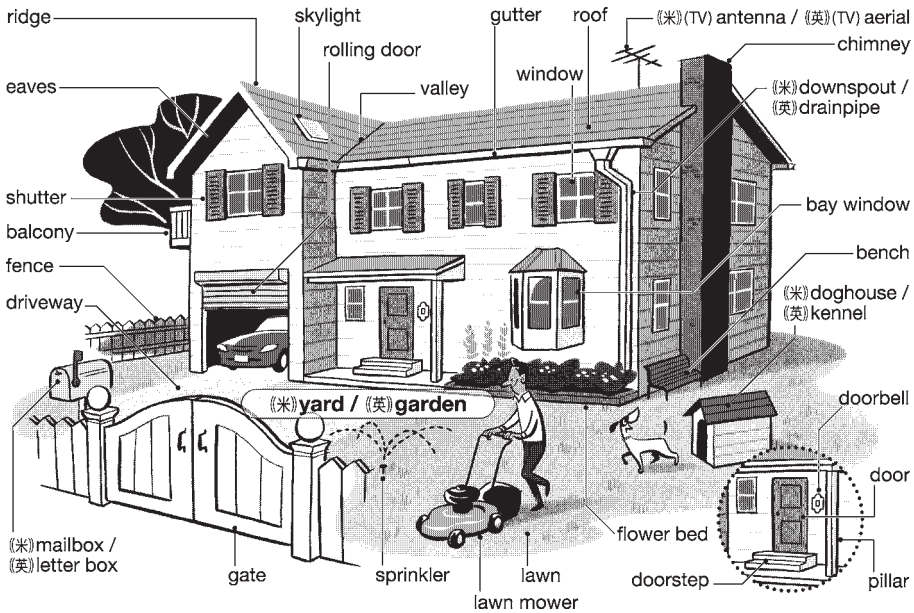
森口　稔

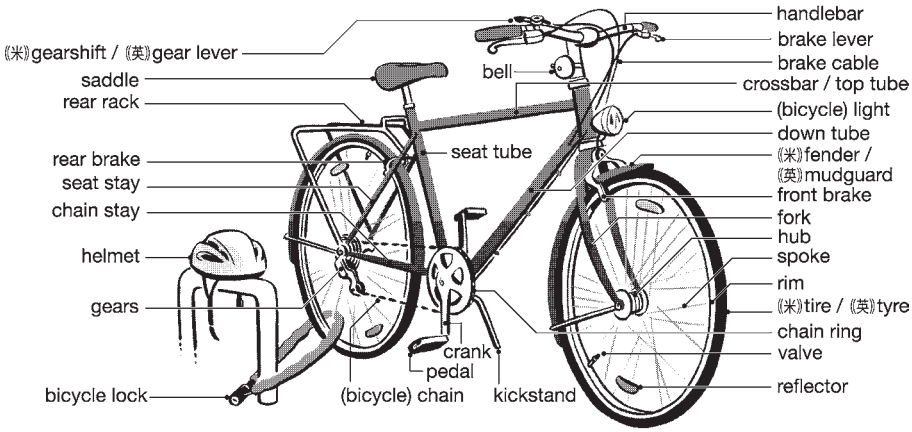
辞書はコトバからコトバを調べるための道具である。しかし，コトバを別のコトバで言いかえる作業には限界がある。そのため，辞書にはさまざまな挿絵や写真が用いられ，電子辞書には動画や音声も入っている。つまり，コトバを理解するためにモノを見る。G 5 で設けられた Picture Dictionary は，挿絵の集合体と言ってもよいだろう。

たとえば，bay window。G 4 では「張出し窓」となっているが，「出窓」という表現に慣れている筆者にはピンとこない。しかし，Picture Dictionary の house の箇所にある絵を見れば即座に理解できる。

同じく，crank。日本語でも「クランク」と呼ぶが，「自転車のクランク」と言われてすぐにわかる人はかなりの自転車通だろう。Picture Dictionary の bicycle を見ると，前の歯車とペダルをつなぐ金属部分であることがわかる。

図示することで，より正確な理解を得られることもある。たとえば，hip。日本語の「ヒップ」は『明鏡国語辞典』によれば，「尻。また，尻回り（の寸法）」となっている。たしかに日本語としてはそういう使いかたが普通である。しかし，*LDOCE*[6] によると，hip は “one of the two parts on each side of your body between the top of your leg and your waist” であり，「尻」でも「尻回り」でもない。Picture Dictionary で確かめると，hip がいわゆる「尻」ではなく，ズボンのポケットの辺りであることがわかる。





このように，Picture Dictionary には，「コトバ⇒モノ」の使いかたがある一方で，「モノ⇒コトバ」という使いかたもある。前者は英和辞典的，後者は和英辞典的であると言えるだろう。

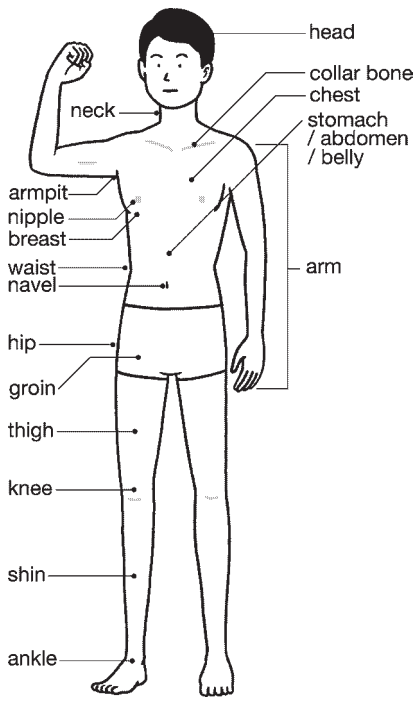
ある事物を英語でどう呼ぶか知りたいとき，通常は和英辞典を引く。そのためには，まず，その事物の日本語での名称を知らなければならない。しかし，もしそれが日本語で何というかわからない場合，和英辞典ではお手上げとなる。

たとえば，台所で洗った物を置く，カウンターの波打っている部分（この説明でおわかりいただけるだろうか）を英語で何というか。縮らせて細く束ねて，縄のれんのように垂らす，黒人のレゲエ歌手がしているような髪型（前ページ右上参照）を何というか。頭の中にははっきりと画像が浮かんでいるのに，言葉にしようとすると，もどかしいほどうまくいかない。Picture Dictionary であれば，それぞれが drainboard と dreadlocks であることが一目瞭然である。

Picture Dictionary には学習上の利点もある。通常の見出し配列はアルファベット順だが，Picture Dictionary は，いわば，概念配列である。スペルに関係なく，身体の部位，教室の備品，図形や色など関連する表現がワンセットで掲載されている。アルファベット順では退屈感を覚える学習者も，楽しみながら覚えられるだろう。また，house と geography の両方に ridge という単語が出ている。2 つの ridge を見比べることで ridge の基礎概念の理解に役立つはずである。

モノとコトバをダイレクトに関連付けた Picture Dictionary には，ほかにもいろいろな可能性があるだろう。辞書ユーザーがそれらを見つけて，楽しんでくれることを期待したい。

（もりぐち　みのる・長浜バイオ大学非常勤講師）



英語デジタル教材作成・活用ガイド

PowerPointとKeynoteを使って

唐澤　博・米田謙三　著

A５判・192頁
本体1,800円＋税

［評者］
大西久雄

授業で安心してICT活用ができるガイド誕生！

高校英語科教員かつICT活用というキーワードで，東西の白眉と言える２人のオーソリティが書き下ろした本書は頼もしい。英語，ICT共に関心の高い向きにとって待望の書であろう。小学校や中学校の英語に関わる教員にとっても，押さえるべき点，知っておくとよい点等々，校種こそ違うがすぐ授業で活用できる事例が随所に散りばめられており，大変行き届いた内容となっている。ICT環境整備，その活用授業の考え方，教材づくりの基礎と応用，活用で直面する課題への向き合い方，活用事例の６つの章と資料集からなる。中でも第４章の教材集にあるフラッシュカードの作成は大いに役立つ具体例である。当例に限らず教材作成の解説が，画像の背景削除，PDFファイルの分割，パワーポイントの暗転，明転等が，実際に授業でICT活用をしようと考えている者にとって，知っておくと便利で嬉しい“ちょいテク”なのである。実践者だからこそ気づく優しい視点だ。

また，本書は単なるスキルのハウツーものに留まっていない点がよい。デジタルやネットを活用する上で押さえなければならない配慮事項に目が届いており，抜かりない。例えば，とかく学校教育現場では疎くなりがちな著作権に関わる知識と情報，それを踏まえた情報モラル教育の年間指導計画例などは，教員にとってありがたいページである。そして，ICT活用能力を高めるためには教員の研修が大事であることは言うまでもないが，教員のみならず管理職を対象とした研修に視座が置かれていることも注目すべき点だ。ICTを学校で効果的に活用するためには，管理職の意識の向き方が重要であり，必要な指摘であろう。さらに，研修会で実際に使用するワークシートが添付されているのも具体的，かつ実践的で役立つ。

デジタル教材を英語授業に活用するために書かれた本書ではあるが，私が一番に感心させられた点は，とかく使い方の説明しっぱなしの書籍が多い中，何のために活用するのかの本質がしっかり示されている内容になっているところである。現在のICTの潮流を紹介しつつ，プレゼン力や反転授業などに触れながら，ICTを活用してどんな子供たちを育成すべきなのかが明確に打ち出されている。そして，子供が得た力を，実際の学校生活や社会の中で，どのように活用していくことが大事なのかをプロジェクト学習の例を示しながら，提案しているのは素晴らしいことであり，本物である。これからの情報化社会に対応したICT活用授業のガイドとして，本書は間違いのないお薦めの一冊である。

（おおにし　ひさお・
越谷市教育センター所長）

英語教師のための文法指導デザイン

田中武夫・田中知聡　著

A５判・264頁
本体2,200円＋税

［評者］
溝畑保之

コミュニケーションのための文法指導を目指す教師の必読書

あなたはどのタイプの先生？Aタイプ：従来からある文法項目を，日本語で説明し，確認のための穴埋め，並べ替えドリルを行う授業方法しか知らない。Bタイプ：最新の「タスクを使った指導」に挑戦してみようとするが，活動が盛り沢山過ぎて消化しきれない。

Aタイプの場合は，文法をコミュニケーションを支える基盤と位置づけ，その考えを教材研究に活かし，どう指導のステップを工夫すればよいかを学べる。本書では次の４つのプロセスが丁寧である。(1)指導実態についてのチェックリストで現状を振り返る。(2)留意すべきポイントについての解説が行われる。効果的な図表とイラストが使われているので，わかりやすい。(3)工夫の乏しい指導と優れた指導が具体的に示されていて，比較しながら，望ましい指導の理解が深められる。さらに，(4)発展的な指導を生み出せるようなヒントや情報が豊富にある。

「タスクを使った指導」等に着手しているBタイプの先生には，英語教育コラムが役立つ。第二言語習得理論の知見である「暗示的・明示的知識」，「フォーカス・

オン・フォーム」,「グラマーリング」,「アフォーダンス」,「帰納的・演繹的指導」,「アイテム学習・システム学習」,「転移適切性処理」がよく整理されている。これらをEFL環境での授業にどう包括的に具現化するかを考えるとよい。その際，本書の「授業展開をシンプルにする」ための指針と「コミュニケーション体験と文法指導のサイクル」を応用すると，無理なく理論を利用できる。

評価については，筆記テストでもコミュニカティブにする工夫が紹介されている。さらに，実施が困難視されるパフォーマンステストを行うための工夫が評価方法と合わせて紹介されている。指導と評価の一体化を目指せる。

また，Q&A BOXでは，文法指導で避けて通れない,「文法も英語で」,「文法用語の扱い」,「誤りの修正」などについての質問に明快な解答を用意している。

著者達が主張しているのは,「学習の時点の状況が，将来実際に使う状況と一致していればいるほど，その学習内容がうまく使える」に集約されよう。明日教える文法事項にも，この方針に則る工夫が導き出せるような構成となっている。「一人一人の先生が，自分の生徒に合った文法指導ができるように成長できる」ことを願いながら，２名の著者が協力し，書き上げていることがよくわかる。

単なる記号として文法規則を教えるのであれば，生徒の目は輝かない。穴埋めや整序問題での指導を超えた「コミュニケーションのための文法指導」を目指す教員にとって本書は必読の書である。

（みぞはた　やすゆき・大阪府立鳳高等学校教諭）

英単語運用力判定ソフトを使った語彙指導

CD-ROM付

門田修平・野呂忠司・氏木直人・長谷尚弥　編著

A５判・186頁・CD-ROM １枚
本体2,100円＋税
［評者］
阿部　一

研究成果に基づく語彙学習・語彙指導の提案

語彙学習といえばそこにはシステマティックなやり方はなく「ただ単語をひたすらに覚えていくしかない」という考えが，長いこと現場の学習者や教師だけでなく，外国語教育の専門家の間でも根強かった。したがって，その研究分野自体がどうしても地味で停滞気味であった。しかし，特に1980年代以降，関連分野を含めた科学的な語彙研究が進むにつれて，語彙領域自体にもかなりシステマティックな構造があることがわかってきており，最近では新しい認知的な視点からの研究やその成果を生かした教材化や指導などの試みが数多くなされてきている。また，その研究や語彙分析には言語学だけでなく，心理学（特に認知心理学）やコンピュータ科学（特にコーパス処理）なども多大な貢献をしている。

本書はそのように活発に研究されるようになってきた語彙や語彙知識を新たに理論面から見直すことと，その枠組みでの新たな語彙学習や語彙指導を現場に提案するべくタイミングよくまとめられた好著である。これまでも早い段階から心理学的なアプローチで独自の成果を多数発表されている著者とその研究グループによる，研究成果に基づいて学習・教育現場への本格的な応用を目指したものである。特に語彙学習や語彙指導という難しい分野に，語彙知識を「知っている語彙力」と「使える語彙力」とに分け，あいまいな形でただひたすら覚えて数を増やしていこうという従来の方策に警鐘を鳴らし，大事なことは「知っている」語彙力を実際に「使える」語彙力に転化することだと指摘，そのための学習法及び指導法への道筋を数多くの実証データに基づいて提示している。

その上で研究成果に基づいたこれまでの単なる「知っているだけの知識」とは異なる,「使える語彙の運用能力」を測定するテスト（略称CELP）を学習者及び教師に付属CD-ROMとして提供もしている。もちろん，これまでも語彙研究やその関連分野で語彙関係のテストやテストプログラムも発表されたり，現場に導入されているケースもあるが，著者たちはこれまでの語彙知識の「深さ」や「広さ」を測るものとは違って，今回，提唱のモデルでは語彙運用がどれだけ「自動化」されているか，また，その「スムーズさ，滑らかさ」はどうかを測定できる点に特徴があるとしている。今後，わが国でもさらに語彙研究に加えて語彙学習や語彙指導の「質的な」効率性や重要性がより高まっていくことは間違いないので，その意味からも“語彙と語彙習得の理論と実践”の流れに重要な一石を投じた本書の登場は実にタイムリーかつ大いに意義のあることだと言えよう。

（あべ　はじめ・英語総合研究所所長）

大修館書店の本

◆コーパスは英語教師の強い味方
英語教師のためのコーパス活用ガイド
赤野一郎・堀正広・投野由紀夫＝編
（B５判・256頁・本体2,000円＋税）

◆さあ，始めよう！　パワポで授業。
英語デジタル教材作成・活用ガイド
唐澤博・米田謙三＝著
（A５判・192頁・本体1,800円＋税）

◆多様なバイリンガルの実像が明らかに
バイリンガリズム入門
山本雅代＝編著
（A５判・256頁・本体2,000円＋税）

◆報・連・相のエッセンス！
「大人の日本語」養成講座
野内良三＝著
（四六判・218頁・本体1,500円＋税）

◆英国のゴーストは愉快？
ゴーストを訪ねるロンドンの旅
平井杏子＝著
（A５判・226頁・本体2,300円＋税）

お知らせ

小社英語教科書についてのご質問，感想などを小誌編集部宛にお寄せください。「G.C.D. 教科書 Question Box」で随時ご紹介・ご回答してまいります。

また，小社教科書を使った授業の紹介などのご投稿（郵送のみ）をお待ちしております。（採否のご連絡は致しておりません。また，原稿はお返ししません。）

なお，小社ホームページ「燕館」には小社教科書の内容をご案内しているサイトがございます。ここでは，英語の先生方に役立つ様々な情報も提供しております。

http://www.taishukan.co.jp/gcdroom/

営業便り

▶先生方におかれましてはお忙しい日々をお過ごしのことと存じます。平成27年度にお使いいただく教科書のご注文が全国の高等学校より多数寄せられました。ご採択いただいた先生方に，この場をお借りして厚く御礼申し上げます。▶「今日は冬型の気圧配置で晴れるでしょう」，私が担当する静岡県で冬に天気予報でよく聞く言葉です。雨や雪の日が多い島根県出身の私にとってこの言葉には驚きました。そんな快晴の日が多い冬は，富士山がきれいに見える時期でもあります。見ると思わず見入ってしまい，その存在感と雄大さに圧倒されます。学校によっては教室やグランドから見えるので，そんな環境で高校生活を送る生徒さんがうらやましく思えます。▶さて，今年の秋に『ジーニアス英和辞典　第５版』を刊行いたします。第４版発行以来８年振りの改訂となります。小社営業担当者が学校へ見本を持ってご案内に参ります。ご多忙中とは存じますが，何卒宜しくお願い申し上げます。

（名古屋支店　細田浩史）

編集後記

▶ジーニアスのような高校生むけ学習英和辞典は重さや厚さといった物理的側面と，単行本に比べて高い価格などの経済的側面で，その流通冊数の多さから，単行本とは扱いが全く異なります。そんな裏事情を少しだけ紹介します。▶出版社から仕入れる卸業では各出版社の刊行予定を年度当初に確認します。自社内での仕入予算を計上するためです。ここでおおよその仕入れ額が決まります。▶次の段階は実際の刊行よりひと月前ほどです。出版社は宣伝計画などで力の入れ方を卸業へ示し，なるべく仕入冊数を積み上げられるようにします。刊行が当初の予定より遅れれば予算以下に削られたりすることもあります。▶最後は納品直前の時期です。流通量が多い辞典は商品保護のため一定数で箱詰めされてます。小売り向けの配本は１冊単位となるので，重さと開梱から作業にひと手間かかり，特別な作業工程を要します。▶流通でもひと手間をかけてお届けする『ジーニアス英和辞典　第５版』，ご愛用のほどよろしくお願い申し上げます。（皐）

Genius·Compass·Departure
英語通信

第54号
2014年11月30日発行
（年２回発行）

編集人：©「G.C.D.英語通信」編集部
発行人：鈴木一行
発行所：株式会社　大修館書店
〒113-8541　東京都文京区湯島２-１-１
電話（03）3868-2292（編集部）／（03）3868-2651（販売部）
［出版情報URL］http://www.taishukan.co.jp　［振替］00190-7-40504
印刷・製本：文唱堂印刷株式会社

Ⓡ本誌のコピー，スキャン，デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本誌を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは，たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。